

「武
唐
平
成」

「文」第八十三号
元年十月二十五日
発行
抜刷

and similar papers at core.ac.uk

左日記略注（五）

徳
原
茂
実

土左日記略注(五)

徳 原 茂 実

本稿は『武庫川国文』第七十九、八十、八十一、八十二号(平成二十七年十一月、二十八年三月、十一月、二十九年二月)に連載した「土左日記略注(一)」「(四)」を承けて、『土左日記』の二月一日条から二月八日条までの中から、問題とする箇所を含む本文を引用し、私見を述べる。「凡例」は「略注(三)」掲載のものを参照されたい。なお、これまでの拙稿同様、この日記を書いたとされている女性については括弧付きで「作者」と表記し、真の作者紀貫之と区別する。

二月一日

あしたのま、あめふる。むまときばかりにやみぬれば、いづみのなだといふところよりいでてこぎゆく。

(注)「あしたの間、雨降る」は、午の時ごろ(正午前後)まで船出が遅れた理由を述べたのである。当時、雨が航海の大きな妨げであったことは、一月十四日条の「暁より雨降れば、同じ所にとまれり」、同十七日条の「この間に雨降る。いとわびし」などによっても明らかであろう。同十二日条に「雨降らず。ふむとき、これもちが船の遅れたりし、ならしづより室津に来ぬ」とあるのは、僚船を待った

めに「折角の晴天を無為に過ごしたという後悔の意味をこめて、わざわざ「雨降らず」と特記したのであらう」という萩谷朴『全注釈』(一八七ページ)の説に首肯されるところである。

「和泉の灘」については、和泉国の海域・海岸を広く指す名称であったとする説に従いたい。ただし私は、「略注(四)」の一月三十日条に述べたように、旅立ちにあたって、「和泉国までと、たひらかに願立つ」(十二月二十二日条)と願った待望の海域に船が到達したことを喜んだ男たちが、「和泉の灘」の名を連呼したために、「作者」はそれを停泊地の地名と誤解した(ということになっている)のではないかと考えるものである。「……といふ所」というのは、「作者」が地名や、地名に準じる名称を記述する際に多用する書きぐせであり、一月三十日条、二月一日条に「和泉の灘といふ所」とあるのは、彼女が「和泉の灘」を、この夜の停泊地をさす地名と認識したための表記と解しうる。また二月一日条で「(和泉の灘といふ所)より出でて漕ぎ行く」と記述しているのも、「作者」が「和泉の灘」を、広い海域・海岸ではなく、停泊地の地名と誤解しているからにはかななるまい。ところが「作者」は後に、この誤解に気付いた(ことになっている)ようで、二月五日条に「今日、からくして、和泉の灘より、小津の泊りをおふ」とあるのは、「和泉の灘」についての正しい認識にもとづく記述である。これについては後述する。

またふなぎみのいはく、このつきまでなりぬることとなげきて、くるしきにたへずして、ひともしふこととて、こころやりにいへる

ひくふねのつなでのながきはるのひをよそいかまで

われはへにけり

きくひとのおもへるやう、なぞただこととなると、ひそかにいふべし。

〔注〕船君の「この月までなりぬること」との発言は、一月十六日条の「さて、船に乗りし日より今日までに、二十日余り五日になりけり」という記述とかかわらせて考えることができるように思う。「略注（三三）」の同日条に述べたように、二十五日という日数は、『延喜式』主計上に、京と土佐国府間の往復の日数について、上り三十五日、下り十八日、海路二十五日とされていることと、かわりがあるだろう。船君の心積もりとしては、立春を待つて国府近くの大津を出航し、土佐国の海の玄関口ともいべき大湊でスタンバイし、正月早々に大湊を出航すれば、海路二十五日という日数に何日間かの余裕を上乗せしても、一月中には京に帰着できると踏んでいたのであろう。ところが、二月に入っても未だに和泉国の海域を航行中というのでは、大いにあてが外れたわけであって、「この月までなりぬること」という慨嘆は、作中の船君の心情として、また、実際のこの日の貫之の心情としても、よく理解できるように思う。

船君の歌の第二句は、青谿書屋本では「つなてやなかき」であるが、為家本によって「つなてのなかき」と校訂した。その他の諸本も「つなてのなかき」である。萩谷朴「青谿書屋本『土佐日記』の極めて少ない独自誤謬について」（『中古文学』第四十一号 昭和六十三年五月）参照。

船君の歌に対する「なぞただことなる」という評語から連想されるのは、『古今集』仮名序の、「そもそも歌のさま六つなり」と始まる、一般に「和歌六義」と称されている件りの中の一節、「五つにはただごと歌、いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし」である。ここに挙げられている「いつはりの」の一首については、続く仮名序古注（後人注）において、「ただごと歌」の例としてはふさわしくないとされているが、それは「ただごと歌」に漢詩六義の「雅」をあてはめて解釈した結果であって、筆者貫之の意図とはかわりがない。貫之は仮名序「歌のさま六つ」の条においては、和歌を分類したところ、六種に分けることができた、その六という数字は、たまたま漢詩の六義と同数であると述べている（強弁している）のであって、「そへ歌」以下の六種に漢詩の六義（風、賦、比、興、雅、頌）を当てはめる、古来よくある解釈は誤りなのである。六首の例歌は、貫之自身によって列挙されたものではないかもしれないが、古注が付される前に、すでに仮名序に備わっていたものであって、貫之の意図と大きなへだたりはないであろう。拙稿「古今集仮名序「歌のさま六つ」例歌存疑」（『武庫川国文』第五十九号 平成十四年三月）参照。

「いつはりのなき世なりせば……」の一首は、『古今集』巻十四、恋歌四所収の歌で（七一二番歌）、この部立に従うならば、「いつはり」は不実な恋人の甘言を意味するが、恋歌と限定せず、広く世の中に対する慨嘆として読むことも可能である。いずれにしてもこの一首は、技巧を凝らさず、心情を率直に吐露した言葉が和歌の形をとった作の代表として、「ただごと歌」の例歌に挙げられたのであろう。なお、「ただごと歌」はあくまでも和歌の風体の一種であっ

て、作品の価値をおとしめる文言ではない。現に「いつはりのなき世なりせば……」の一首は『古今集』入集歌であるし、『土佐日記』の「世の中におもひやれども子をこふるおもひにまさるおもひなきかな」（一月十一日条）や、「なかりしもありつつかへる人の子をありしもなくて来るがかなしき」（二月九日条）などは、いかにも「ただごと歌」風であるが、何ら否定的な評価はなされていない。

さて、船君の作「ひく船の綱手の長き春の日をよそかいかまで我はへにけり」が「ただごと」と評されたのはなぜであろうか。「ひく船の綱手の」は眼前の囁目であるが、「長き春の日」を導く序詞であり、「長き」は掛詞として上下を連結している。「長き春の日」を長い綱手という物に喩えた技巧である。したがってこの上句に關しては、「ただごと」との評は当たらないように思われる。おそらく問題は下句なのであって、「よそかいか」（四十日五十日）が俗語であるのみならず、「四十日も五十日も、私は船旅に費やしてしまった」という愚痴も俗談調で、そのために「ただごと」なる不評をこうむってしまったのであろう。和歌を苦手とする船君であっても、貴族社会の住人であるからは、「ひく船の綱手の長き春の日」程度の和歌の技巧をこらすことはできる。しかしそれは付け焼刃にすぎなくて、下句の雅びならざる語彙や発想によって、すぐさま化けの皮がはがれてしまったのである。おそらく「なぞただごととなる」という評は、この歌の下句についての感想であって、この歌の風体を「ただごと歌」と認定したのではないだろう。

にはかにかぜなみたかければ、とどまりぬ。

（注）前日、多奈川（大阪府岬町多奈川）沖を経て某所に停泊した船は、この日、「黒崎の松原」（大阪府岬町淡輪）沖を通過し、「箱の浦」（大阪府阪南市箱作の海岸）からは綱手によつて曳航されたが、「にはかに風波高ければ、とどまりぬ」とあるように、急な風波のために航行を断念し、近くの港に留まることとなったのである。それがどこであるかは明らかでなく、「箱の浦」から先の某所としか言えないが、『全注釈』は「箱の浦以北の寄港地を仮に求めると、いまの泉佐野市、貝塚市、岸和田市あたりが、その候補地として考えられる」としている。妥当な判断であろう。

一方、村瀬敏夫は『土佐日記「旅程考」』（平林文雄教授退官記念論集 平安時代日記文学の研究）所収 平成六年十月 和泉書院において、阪南市と泉南市の境を流れる男里川（現在地元では「おのさとがわ」と呼称）の河口「男津」がその寄港地であるとの説を唱えている。「箱の浦」からは約五キロメートルで、近すぎるようでもあるが、可能性は皆無ではない。しかし村瀬が、「和泉の灘」から「をづのとまり」へ向けて出港したという二月五日条の記述について、貫之は出発地である「男津」を目的地の名称と取り違えたのであると主張しているのには同意できない。和泉国に土地勘のある貫之が、出発地と目的地の地名を取り違えることはありえないし、女性「作者」がそのようなミスを犯したとする虚構を構えたところでも、何らかの意味があるとは思われないからである。

二月四日

かちとり、けふかぜくものけしきはなはだあし、といひて、ふねい

ださずなりぬ。しかれども、ひねもすになみかぜたたず。このかち
とりは、ひもえはからぬかたなるなりけり。

(注)「この楫取は、日もえはからぬかたなるなりけり」には、いつも
ながらの「作者」の楫取に対する無理解と嫌悪感が表現されてい
る。一月二十一日の室戸岬越えや、同三十日の鳴門海峡・紀淡海峡
通過など、楫取の操船の見事さは高く評価されようが、「作者」は、
そのようなことには全く無頓着な人物として造形されているのであ
る。一月十七日に室戸岬越えを試みた際に、天候の急変を予想して
引き返すなど、安全運航のための楫取の慎重な判断も、「作者」の
評価するところとはならない。この日、「今日、風雲のけしきはな
はだ悪し」と判断して出航を取りやめたのも、楫取の慎重さのあら
われと言えようが、それを判断ミスとしてあげつらい、「日もえは
からぬかたぬ」とまで放言する傲慢さには、彼女のかなり強烈な個
性が描き出されていると言えよう。

このとまりのはまには、くさぐさのうるわしきかひ、いしなどおほ
かり。かかれば、ただむかしのひとをのみこひつつ、ふねなるひと
のよめる

よするなみうちもよせなむわがこふるひとわすれがひ
おりてひろはむ

といへば、あるひとのたへずして、ふねのころやりによめる

わすれがひろひしもせじしらたまをこふるをだにも

かたみとおもはむ

となむいへる。をむなごのためには、おやをさなくなりぬべし。た

まならずもありけむをと、ひといはむや。されども、ししこかほよ
かりき、といふやうもあり。

(注)「この泊の浜には、くさぐさのうるわしき貝、石など多かり」
からは、同行の女性たちや童たちが、船から浜へ降りて美しい貝や
石を拾い興じている情景が浮かび上がる。したがって、皆と一緒に
なって船を下りて浜遊びを楽しむ気にもなれず、船に居残った亡き
女兒の母を、特にここでは「船なる人」と呼称したのである。作
中、「船なる人」という表現はこの一か所のみである。女兒が健在
であれば、まっ先に女兒と共に船を下りて貝や石を拾い興じたであ
ろうことが想像されるだけに、ここで彼女が「船なる人」とされて
いるのは、その痛ましい心情をきわだたせる効果がある。彼女の
歌には「降りて拾はむ」とあるが、それは「人忘れ貝」が浜に打ち
寄せられたらとの条件付きであって、そのようなことは実際にはあ
りえないというのが前提なのである。

続いて「ある人」が「忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにも
形見と思はむ」と詠み、それが「となむ言へる。女兒のためには親
をさなくなりぬべし」と受けられているのは、この「ある人」が亡
き女兒の「親」であることを明示しており、先の「船なる人」が女
兒の母との推定に従うならば、この「ある人」は女兒の父である。
「ある人」はおそらく「在る人」の意で、傷心の妻の傍らにあって、
船中の無聊を慰めようとしているのである。亡き女兒の父の存在は、
二月九日条に「父もこれをききて、いかがあらむ」と明記されている。
なお、「忘れ貝」を拾おうとの母の詠歌は、二月五日条の母の歌「住
の江に船さしよせよ忘れ草しるしありやと摘みてゆくべく」の「忘

れ草」と対応している。

「かかれば」以下、「と言ふやうもあり」まで、亡き女兒の家族がクローズアップされている。「玉ならずもありけむをと、人言はむや」は、家族以外の人たちからの、亡き女兒に対する醒めた意見を予想しての、家族の一員たる「作者」によるあしらいである。「されども、死し子、顔よかりきと言ふやうもあり」は、当時の諺を援用しての、家族の立場からの弁明となっている。なお、これまでの拙稿で繰り返し述べてきたように、亡き女兒は船君の子ではなく、もちろん貫之の子でもなく、作中の「作者」一家の子供である。

二月五日

けふ、からくして、いづみのなだより、をづのとまりををふ。

(注)「和泉の灘」に「といふ所」が下接していないのは、二月一日条にも述べたように、ここでは作者が「和泉の灘」について、それが地名ではなく、広く和泉国の海域・海岸をさす名称であると正しく認識していることを裏付けていよう。彼女は二月一日条の日記を記述したあと、そのことを学習したのであり、かといつて一月三十日条と二月一日条の記述を訂正はしなかった(ということになっている)のである。

この日の航海の目標は、和泉国の海域・海岸を脱して、「をづの泊」に達することであった。村瀬敏夫も前掲論文で指摘しているように、この作品で「○○をおふ」とある場合、それは○○への到達を意味するのが常であるからだ。すなわち、十二月二十八日条の「浦

戸より漕ぎいでて、大湊をおふ」、一月九日条の「大湊より奈半の泊をおはむとて漕ぎいでけり」、一月十一日条の「あかつきに船をいだして室津をおふ」では、いずれもその日のうちに目的の泊に到着しているのである。したがって、この日の「和泉の灘よりをづの泊をおふ」も同様に理解するならば、「をづの泊」が和泉国内の港であるはずはなく、それを現在の和泉大津とする通説は誤りである。「大津」は「おほつ」であり、「をづ」とは仮名遣い(音韻)が異なるにもかかわらず、「小津」が転化して「大津」になったといわれる(学術文庫)などと無理な説明がなされてきたのは、「をづ」に相当する地名が付近に見あたらなかったせいであろう(村瀬がこの日の出発地を「男津」とし、それを作者貫之が目的地の名称と取り違えたと主張したのは苦肉の策)。

「小津の泊」をどのあたりに想定すればよいかといえば、この日、船は住吉の沖合を通過しており(住吉は摂津国であるから、予定通り、船は和泉国の海域を脱したことになる)、翌六日に「落標のもとよりいでて」とあるから、船は難波津あたりまで達したのである。難波津が日本一の「大津」であるのに対して、その入口に位置する外港を「小津」と称したのであろう。難波津が「大津」とされた例は、『日本書紀』仁德天皇三十年九月条に見える。

ゆけどなほゆきやられぬはいもがうむをづのうらなる
きしのまつばら

(注)「妹が續む麻(を)」から掛詞によって「をづの浦」へとつながっているのだから、仮名遣いは「おつ」ではなく「をづ」である

ことが明白である。ちなみに、すでに指摘されているように、『更級日記』において、作者が和泉国に下向し、冬になって上京した折に、暴風雨を避けた和泉国の泊は「おほつといふうら」であって、「をづ」ではない。「をづの浦」は、「和泉の灘」の海域を脱して「小津の泊」へと向かう海域を、仮に「小津の浦」と称したのであろう。

かくいひつづくるほどに、ふねとくこげ、ひのよきに、ともよほせば、かちとり、ふなこともいはいく、みふねよりおふせたぶなりあさきたのいでこぬさきにつなではやひけ、といふ。

(注)「船とく漕げ、日のよきに」と催促したのは船君であろうが、それを承けて、楫取が船子たちに「綱手はや引け」と命じている点について、船君の権威失墜との見方がある。たとえば『全注釈』は次のように述べている。

「ところで面白いことは、呑気そうに曳き船をしているのを見て、じれったくなった貫之が、艫を漕いだ方が速度が上がると考えて「船とく漕げ」と催促したのに、楫取りがそのような素人考えを無視して、その「負せ」言を「綱手はや曳け」という命令にすり変えてしまっていることである。餅屋は餅屋というところであろうが、その馬耳東風といった態度に、船君（傭船主）としての権威を無視されて、貫之は一層楫取りに不快の感情を強めたことであろう。」

一方、『学術文庫（品川和子）』は「この、楫取りの水夫への命令は「船疾く漕げ」という雇主側、すなわち貫之一行の命令を無視しているのに「み船よりおほせ給ふ」などと過剰なまで敬語を使っているのはなんとなく、ユーモアを感じさせる」と、『全注釈』とは異なっ

た観点からの柔軟な読解を示しているが、いずれにしても、楫取が船君（両者が「貫之」を持ち出しているのは、例の、作者と作中人物の混同）の命令を無視していると説く点、共通している。

しかし、『古今集』巻二十所収の東歌「みちのくはいづくはあれど塩釜の浦こぐ舟の綱手かなしも」を参考にするならば、「漕ぐ」と「綱手」は両立しうる言葉だったとは考えられないだろうか。「漕ぐ」が「櫓または櫂などを動かして船を進める」（岩波古語辞典）の意であることに間違いはなからうが、綱手による曳航をも含め、人力によって船を運航することを広く「漕ぐ」と言ったのではないか。「船とく漕げ」という船君の言葉にしても、船の速度を上げると催促しているのであって、櫓櫂を使用してスピードアップせよとまでの、細かい注文をつけたのではないと思うのである。なお、時代は下るが、右『古今集』歌を本歌取りした源実朝の「世の中は常にもがもな渚漕ぐあまの小舟の綱手かなしも」（百人一首）においても、「漕ぐ」と「綱手」が両立している。

また、いふにしたがひて、いかがはせむとて、まなこもこそふたつあれ、ただひとつあるかがみをたいまつる、とて、うみにうちはめつればくちをし。

(注) 住吉の沖合を通過中、突然の強風によって船は危険にさらされる。楫取の助言によって略を奉るが、風波は増すばかり。もつと神が喜ぶ物をとの楫取の進言に続くのが掲出本文である。「まなこもこそ二つあれ、ただ一つある鏡をたいまつる」という神への口上を述べたのは、通説では船君（あるいは、例によって貫之）であるが、

私見によれば、一月十八日条に見える「船のをさしける翁」による口上である。拙稿「土左日記「船のをさしける翁」について」（『武庫川国文』第七十八号、平成二十六年十一月）、あるいは「土左日記略注（三）」に述べたように、「船のをさしける翁」は船師（現代の船長に相当）であり、船師は通常、船中の神事をも執り行った（遣唐使船のような大船には、別に神事担当の神職が乗り込んでいた）。十二月二十二日条の立願の神事を執り行ったのはおそらく船師であり、二月五日、神への口上を述べ、鏡を海中へ投じるといふ神事を執り行っているのも船師であろう。船中には、少なくとも主立った女性の数だけ鏡は存在するであろうが、それを「ただ一つある鏡」と述べて神を窺絡しようとする度胸は、神事に慣れた船師にふさわしいと言えよう。

なお、この難船事件において、楫取が助言役に徹していることに注目しておきたい。一月二十六日条では、楫取は「手向けする所」において神に口上を述べて幣を奉っているのであるが、前掲拙稿や「土左日記略注（四）」に述べたように、おそらく神祠は岩礁の上のような足場の悪い場所に鎮座しており、「船のをさ」をしている「翁」がそこにたどりつくのは困難であったため、やむなく楫取に代役をつとめさせたのであろう。住吉沖で楫取が助言役に徹しているのは、神事が楫取の職掌でない以上、当然のことである。そして、楫取の適切な助言と船師の機転のきいた口上のおかげで、船は危機を脱することができたのである。

かちとりのころは、かみのみころなりけり。

（注）このくだりについて、『全注釈』は次のように論じている。

「楫取りの心がすなわち神の御心であるという貫之の結論は、決して神そのものを非難しているのではなく、結局は、実際には天候の変化に関与しない神を引き合いに出して、すなわち神威の名を藉りて、おのれの利権をほしきままにする楫取りを非難したことになる。悪いのは神さまではなくて楫取りなのだというのがその結論である。」

まず納得できなく思うのは、「実際には天候の変化に関与しない神」という決めつけである。船が住吉大社の沖合に至った途端に海が荒れ出し、鏡を奉納するやいなやたちまち海が風いだという驚くべき出来事（勿論、フィクションであろうが）を目の当たりにすれば、当時の人々であれば、これを住吉明神の神威のあらわれと信じるのは当然で、「作者」もその例外ではないだろう。科学知識をそなえた現代人とは違うのである。その神威のあらわれがあまりにもあからさまであったために、「作者」は「いたく、住の江、忘草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし」などとにくまれ口をたたいっているにすぎない。「ある人」の歌に「ちはやぶる神の心あるる海に鏡を入れてかつ見つるかな」とあるのも同様である。

次に、「おのれの利権をほしきままにする楫取り」というくだりにも、首をかしげざるをえない。貴重な鏡は海中に投じられたのであって、楫取にとっては何の利得にもならないのである。前項で述べたように、楫取は危機を救った功労者であり、賞賛されてしかるべきであろう。「楫取の心は神の御心なりけり」というこの日の日記のはじめの一文は、日ごろ楫取に不快感のみを覚え、その功績に気付こうとしなかった「作者」が、この日ばかりは、神意を適切

に推しはかった楫取の功績を認めざるをえず、くやしきまでにこのように大袈裟な文句を書き付けたという次第なのであろう。

しぶしぶながらも「作者」が楫取の功績を認めてしまえば、もはや楫取に対する女性「作者」の一方的、主観的な嫌悪感という構図を維持する必要性は薄らいだからでもあろうか、この後、作中で楫取への言及はない。

二月六日

みをつくしのもとよりいでて、なにはにつきて、かはじりにいる。

(注)「みをつくし」は航路標識であり、浅瀬の多い難波津の随所に設置されていたであろうし、それが難波津を代表する景物であったことは常識だが、ここに言う「みをつくし」は、「みをつくしの元より出でて」という表現からして、特定の潯標をさしていると考えられる。おそらく難波津への入口付近に、この先は浅瀬が多くて座礁の危険があることを表示する巨大な潯標が設置され、その潯標の近くには、これから難波津に進入しようとする船のための船溜まりも設けられていたであろう。その船溜まりこそ、二月五日条にいう「小津の泊」にほかならないと思うのである。二月五日、一行の船は住吉の沖合を通過し、難波津の入口附近にまで達したが、すでに夕刻であったため、慎重な操船を必要とする難波津への侵入は翌日のこととして、その夜は難波津の入口に屹立する大潯標の近くの小津の泊に一泊したのであろう。

二月六日、船は難波津の外港たる小津の泊を出航し、大潯標を仰

ぎ見ながら難波津に進入した。「難波に着きて」の「難波」は、難波津全体を意味するのではなく、難波津の中心を成すある地域をさす地名で、そこには難波津を管理する役人や人夫、船員船客を相手にする商工業者などが集落を形成していたのであろう。「川尻」は淀川の河口である。「川尻に入る」とあるが、翌七日条に「川尻に船入り立ちて、漕ぎ上るに」とあるので、この日は川尻に設けられた船溜まりで一泊し、翌日からの淀川遡航にそなえたのであろう。川尻の位置は、現在の天満、あるいは堂島あたりと推定されているが、いずれにしても、この日は難波津の入口から淀川河口までのわずかな距離を一日がかりで航行しているのであり、航路標識を頼りの慎重な操船ぶりがかがえる。

かのふなゑひのあはちのしまのおほいご、みやこちかくなりぬといふをよろこびて、ふなぞこよりかしらをもたげて、かくぞいへる

いつしかといふせかりつるなにはがたあしこぎそけて

みふねきにけり

(注)「かの船酔ひの淡路の島のおほいご」は、一月二十六日条の「淡路のたうめ」と同一人物であろうが、一月九日条に「翁人ひとり、たうめ一人、あるが中に心地あしみて、物もものしたばでひそまりぬ」とある「たうめ(専女)」とも同一人物であろう。これまで、船酔いしたとされる老女はこの人ひとりだからである。一月九日条の「翁人」を貫之、「たうめ」を貫之夫人とする説によれば、淡路島の老女と貫之夫人が同一人物であるのはおかしいが、くり返し述べてきたように、この作品はフィクションであり、実在人物たる貫

之や貫之夫人は登場しない。

和歌に「芦こぎそけて」とあるのは、航路の周囲に猛々しく生い茂った芦を押し分けて船が進むさまの形容で、リアリティーのある表現であるといえよう。このあと船君がこの歌を「いたくめで」とあるのは、和歌が不得意な船君にも、その卓拔さが理解できたという次第なのであろう。

二月七日

けふ、かはじりにふねいりたちて、こぎのぼるに、かはのみづびて、なやみわづらふ。ふねののぼることいとかたし。

(注) 前日、淀川の川尻に達した一行の船は、川尻近くの船溜まりで一泊し、この日、本格的な遡航を開始したのである。「川の水深で、悩まわづらふ」と、この日から川の水深の浅さに難渋するのはそのため、前日航行した難波津は海であるから、干潮時を避けて航行しさえすれば、水深については問題はなかったのである。

かかるあひだに、ふなぎみの病者、もとよりこちごちしきひとにて、かうやうのこと、さらにしらざりけり。かかれども、あはちたうめのうたにめでて、みやこほこりにもやあらむ、からくして、あやしきうたひねりいだせり。

(注) 船君について「もとよりこちごちしき人」と述べているのは、作中人物たる船君についての性格描写であり、実在人物たる貫之と

は関係がないが、当時の読者は当然、船君のモデルは貫之と思って読むであろうから、その船君を女性「作者」が「こちごちしき人」(無風流な人)と評しているのは、一種の読者サービスにはかならない。

「都ほこり」について、『全注釈』は次のように述べている。

「貫之の一族郎党はすべて都人なのであるから、他の地方人に対して、都人であることを自慢する意味の「都誇り」ではない。正月廿六日条の「楫取りいたくほこりて」と同様に、「得意になつて」「意気揚々として」の意の「誇り」である。この場合は、都が近付いて気強くなったことを指す。」

これより後、『学術文庫』は「都誇り」は都に近づいたことを喜び、意気揚々となること」と注し、『古典集成』は「都誇りにもやあらむ」を「都が近づき意気揚々としてであろうか」と現代語訳し、いずれも『全注釈』を継承しているようである。なお『新大系』や『新編全集』も、同様の解釈を示している。

確かに「都人であることを自慢する意の「都誇り」ではない」(『全注釈』)、「ほこり」は自慢するの意ではない(『岩波文庫』)というのはその通りであろう。しかし、都人としての自尊心、矜持といった意味合いで解することはできないであろうか。船君は前日(二月六日)、「淡路の島のおほいご」の歌を「いたくめで」ている。今は「淡路たうめの歌にめでて」詠歌しているのである。「淡路の島のおほいご」と「淡路たうめ」は同一人物であるはずだから、前日の「淡路の島のおほいご」による詠歌と船君の賞賛から、この日の船君による詠歌までは一連の流れであり、その結末が「淡路の御の歌に劣れり。ねたき。言はざらましものを」なのではないか。船君は前日、都人ならぬ淡路島出身の老女の歌に感心し、この日、都人であ

る自らの自尊心にかけて詠歌したが、それが田舎人である老女の歌に劣っていたためにいたく落胆したというのが、前日からこの日にかけての話の流れなのではないだろうか。「都ほこりにもやあらむ」は「都人の誇りにかけてでもあろうか」と現代語訳しておきたい。

ねたき、いはざらましものを、とくやしがるうちに、よるになりてねにけり。

(注) 前節で述べたように、「ねたき」は、田舎人である老女の歌に都人たる自らの歌が劣ったことについての落胆であり、都人としての自尊心が大いに傷つけられた結果「くやしがる」のである。「夜になりて寝にけり」は、単なる事実の記述ではなく、ついさっきまで悔しがっていたはずの船君が、夜になってさっさと寝てしまったという所に、「作者」が一種のユーモアを感じたという次第であろう。熟年男の生態が若い女性の眼を通して活写されるという一幕である。

二月八日

なほかはのぼりになづみて、とりかひのみまきといふほとりとまる。

(注)「鳥養の御牧」は大坂府摂津市鳥飼に所在した朝廷御料の牧。『延喜式』左馬寮に「摂津国鳥養牧」とあるのがこれにあたる。

二月七日に「今日、川尻に船入りたちて漕ぎ上る」とあり、その夜は某所に停泊、そしてこの八日に「なほ川上りになづみて、鳥養

の御牧といふほとりに泊る」とあることから、七日の夜は川尻(大坂市の堂島、天満あたりか)と鳥養の間の某所に停泊したことが知られる。それがどこであったかは不明だが、著名な歓楽の地であった江口(大阪市東淀川区)が鳥養から約四キロメートル下流に位置していることは注目ししよう。七日夜の停泊地が江口あたりであったことは十分想像されるし、たとえそうでなくても、船が江口を通過したことは確実で、男たちは江口の遊女に無関心ではありえなかったはずだ。一方、そのような男たちを尻目に、女性「作者」は江口を完璧に無視し去った(ことになっている)のではない。作者貫之が、女性「作者」の造形に意を用いていることについては、本連載においてたびたび言及してきたところであるが、誰もが知る江口が取り上げられていないことも、多分に意図的な操作と考えるといいのではないだろうか。

かうやうのこと、ところどころにあり。

(注)「ある人、あざらかなるものもて来たり。米して返り事す。男どもひそかに言ふ、飯粒してもつ釣るとや」に続き、「かうやうのこと、ところどころにあり」とある。『土左日記』では常に、日付表示のあとにその日の出来事や感想が記されているのであるが、この「かうやうのこと、ところどころにあり」は例外的に、この日に限らず、このような出来事が過去にも何度かあったことを述べている。勿論それは、この日における回想であって、旅が終わった後での回想がここに書きつけられたのではない。『土左日記』は、紀貫之が土佐国からの帰京後、執筆完成したものであろうが、作品上

のたてまえとしては、女性「作者」が毎日書き記した日記そのままという形をとっているのである。

なお、一月十四日条に、「船君、節忌す。精進物なければ、午刻よりのちに、楫取のきのふ釣りたりし鯛に、銭なければ、米をとりかけて、おちられぬ。かかることなほありぬ。楫取、また鯛もてきたり。米、酒、しばしはくる。楫取、気色あしからず」と、似たような状況が記されている。これもこの日一日の出来事が中心であつて、楫取が昨日釣つた鯛を米と取り換えたあと、味をしめた楫取が、新たに釣つた鯛を持って来たというのである。ただし「米、酒、しばしはくる。楫取、気色あしからず」は、この日の二件のみならず、前日までにもこのような取引が何度かあつたことを想起しての記述ということになつていよう。

（とくはら・しげみ 本学教授）